

探索  
沈黙の丘

— 神秘の湖  
田沢湖畔に眠る超古代遺跡群 —

スタジオ吉祥姫  
田中正勝

# はじめに

西暦二〇〇〇年もあつたという間に、過ぎ去り、二十一世紀到来も秒読みにはいりました。これまで考えてきたような「2001年宇宙の旅」は実現しようにない様子ですが、コンピュータやマルチメディア関係においてはおそらく予想をはるかに超えた進歩になっているのではないしょうか。

私達人間は古代倭国の成立とともに歩いてきた二千年ありとあらゆる文明を作り上げてきました。しかし、物理的な今の現代社会に似合わない古風なものが、少なくともいつているどころか逆に「怪物」「未確認飛行物体」「心霊現象」は、時を経るごとに、より奇怪で難解な物になってきているような気さえします。ちなみにイギリスの田園に出現するミステリーサークルなどは、あたかも二十一世紀の到来を意識したかのごとく、複雑で奇怪に成長しているかに見えます。

私達は地域の歴史を知るために、あらゆる文献を調べます。古老からも話しも聞きます。また、地面を掘り、先住

民の生活の形跡を調べます。しかし、地下に埋まっている、江戸時代の生活跡が発見されると、それに話が集中してしまい、さらにその下に埋まっている物に辿り着かないケースも多いのではないのでしょうか。しかし、今の私達でさえ、先住民の生活した地面の上に家を建てて生活しています。人は皆、先住民が築いた地盤の上で生活します。したがって、地面は掘ればほるほど、時代をさかのぼり、時間をさかのぼっていくのだと思います。その時間はいったい何処までさかのぼっていくのでしょうか。

こうして、人が住みやすい場所というのは、現代においても、また、古代においても、また、神が住んでいたとしても、それは皆同じ場所だと思います。文明の地下には過去の文明、そのまた地下にはさらに過去の文明……これでは、到底古代の文明までたどりつくことができません。

一方、「現在の文明は平地に成り立ち、古代の文明は山岳の尾根に……」と、ある研究者から聞いたことがあります。つまり古代文明のキーワードは「山の上」です。今の文明は山の上にはほとんどありませんので、なかなか近付くことはないでしょう。しかし、古代において、山麓、山頂、尾根には華やかな高度分明が存在したにちがひありません。

南米ペルーの古代遺跡マチュピチュもやはり、外部との接触を避けるように山中深く高度な文明が築かれました。今回の執筆の舞台になった秋田県仙北郡の田沢湖も典型的な山あいの地域です。そして、これらの奇怪な聖域は通常

で人が行き来する場所ではありません。

このような陸奥の山中に古代の巨石文明が存在するなどということは現在のわれわれには到底想像できない事だと思えますが、それが、嘘か真か、夢か現か、まゆつばか……それはだれも断言することはできないと思えます。しかし、それらの「物」がそこにいけば、逃げも隠れもせず、存在しています。その「物」は誰が何と言おうとも現実です。

問題は、それが「何」なのか、ということだけです。

もしも、人が作ったものであるなら、「誰が」「何時」「どうやって」……と。

逆に自然の産物であるというのなら、別の場所のそれ以外の例を提示してもらいたいものです。

また、逆に、自然の産物であるのいうのであれば、まさしく「神の技」としか説明ができません。

これから、ご紹介する一連の体験はできるだけ事実忠実に紹介してあります。取材もできるだけ細かくし、できるだけ読者の皆さんに理解していただきやすく書いたつもりです。

私は、本業が音楽家で文章を書くことはあくまで記録の範囲ではあります。この奇怪で不思議なゾーンのこととはどれだけリアルに伝えることができるかどうかは、いささか不安ですが、まずは「一読ください」。

ただ、ひとこと付け加えるなら、「それ」はすべて事実です。

そして、これらの記録を読むあなたにとって、これを機

会に、これまで以上に幸運が降り積りますように：…心より願っております。

## 「注意」

- 本書はよねしろ新報にて平成五年十一月十三日から二十七日まで連載された「探索・沈黙の丘」と、同年十二月七日から十二月二十三日までに掲載された「続探索・沈黙の丘」を再編集したものです。
- 本文中に登場する多くの方々の「発言内容」「肩書き」等に関しては、あくまでも執筆当時（平成五年）のものです。
- 研究の結果、意見が変化したり、また、現在の肩書きとは異なるお立場の方もおります。
- 本書に掲載された文章ならびに画像の無断転載を禁止します。

# 探索沈黙の丘

— 神秘の湖 田沢湖畔に眠る

超古代遺跡群 —

スタジオ吉祥姫 田中正勝

享保二十年（一七三五）四月に久保田（秋田）の佐藤利兵衛によって書きとられた「田沢鳩留尊仏菩薩縁起」に書かれている摩訶不思議な世界にすべての発端が隠されていました。

## 第一章

# 神々の住む聖域

### 【序】

平成五年七月二十四日、私は田沢湖畔の野外ステージでの演奏のため前日から田沢湖を訪れていました。夏の野外コンサートは花火やレーザー光線など、いわゆる「光もの」の演出が加わるため夜の公演が主体です。この日に行われた「第二十三回田沢湖まつり」も夜七時半から私の演奏で「吉祥姫シンセサイザーコンサート」が、同八時から「湖上花火大会」が盛大に繰り広げられ、祭り初日に音と光のページェントが展開しました。

今思えば、すでにその日が田沢湖畔の神々との出会いの時だったのでしょうか。まさに運命的な時を過ごしたような気がします。

## 【その日】

音楽家として本格的な活動を始めて五年目の平成五年。この年は四月に念願のアルバムCDを発売。予想以上の反響と売れ行きで新年度スタート時点から順調に滑り出しました。春のイベントでの演奏も無事終えて本格的な夏のイベントシーズンが到来した七月、早期実現を目標にしていた県外での演奏が実現。二十二日、日本三景にも数えられる宮城県松島にてレーザー光線の空間演出で野外コンサートを行うことができました。この日は深夜まで撤収作業が行われたため、翌二十三日を移動日として松島から秋田へ向いました。

二十四日には「第二十三回田沢湖まつり」が行われるため、松島から直接田沢湖に入るという前日入りのスケジュールとなりました。音響スタッフの「ムツワヴィジュアル」も二十三日の昼頃には仮設ステージ用の大型トラックを特設会場に据えつけ、私の演奏のための設営を行ってくれました。

私は、車内に演奏に使用する楽器などの機材を満載していました。その数は尋常ではありません。キーボードシンセサイザー八台、周辺機器十数台、さらに関連資料……。五人乗りの乗用車の助手席まで使用しています。そのままで走れることはもちろん大変なのですが、コンサートの移動には致し方ないことです。この上坂道が多いと、車内で荷崩れをおこして大変なことになりかねません。早く機材をおろしたかったです。が急ぐわけにもいきません。山道を

慎重に運転し、なんとか会場に到着しました。

到着してみるとステージの設営がかなり遅れていました。状況を確かめるどころか、特設ステージの概観もいまだ現れていません。本来であれば一緒に準備したいところですが、野外特設ステージの設営などという作業はちよつとした建設現場のようなもので、素人の手におえるものではありません。時には、クレーン車や高所作業車、さらに高圧電源に携わる作業もあります。

私はステージへの機材の搬入をあきらめ、焼けつくような太陽の下、設営作業をするスタッフを横目に宿泊場所にチエックインして冷たいビールで喉を潤しました。ほろ酔い気分で設営会場を覗いて見ると深夜も作業が続けられていました。

明け方には仮設ステージが完成しました。早朝に起きて見に行くつもりが、気がついた時にはすっかり朝になって作業もとくに終了していました。

明けて二十四日。私は運搬車から完成した仮設ステージに演奏機材を降ろしました。車から降ろしたはいいが、ステージ上の細かい作業が終わっていなかったので私のセッティングは午後になりそうでした。車に積んでいた演奏機材も降ろしたし、身軽になった車で私は「乳頭温泉郷にもいってひと風呂浴びてこよつかな」と車を走らせました。

国道三四一号線の交差点を横切り、高原の温泉郷へと向かいました。私は大地からの恵みを具体的な形にしたような「温泉」が好きで、地元鹿角市の八幡平温泉郷はもとよ

り県内あちらこちら行く機会があるつとなかるつと、ガイドブック片手に温泉巡りをすることが趣味でもあります。むろん乳頭、田沢湖高原温泉郷もその全ての温泉につかってみたい温泉郷のひとつです。

まるで池にでも入っているような大きな露天風呂で知られる鶴の湯をはじめ、おおがが大深温泉、たまがわ玉川温泉、くろがゆ黒湯温泉、みずさわ水沢温泉郷と田沢湖界限でもこれまでたくさんさんの温泉を訪れたことがあります。車を高原へ走らせながら、私は「今日ほどの温泉にはいるうかな」と心はずませしていました。そして、ガイドブックの写真で透明なお湯があることを知っていた「たえのゆ妙の湯」に行きました。

山あいの小さな温泉宿ながら建物全体が個性的なセンスに富み、特に照明は手すきの和紙や生け花を効果的に飾ったしっとりした雰囲気温泉でした。

まずは内風呂。お湯はガイドブックで見たとおり透き通ったものでした。奥の扉を開けるとそのまま露天風呂にいくようになります。私は「ものは試し」と、露天風呂に向かいました。

その時です。左の足下から何か語りかけてきました。それは耳から聞こえるものでも、光で注意をひくものでもありませんでした。でも、確かに「何か」が。むろん瞬間のことでしたが、私は時間の軸がねじ曲げられるような誘導的に語りかけてくるものに導かれ、露天風呂の入口を凝視しました。

そこには何の変哲もない川原石が露天風呂の塀垣として

置いてありました。しかし私はさらに石を見続け、ついに石の下の部分に描かれている何本かの線刻紋様を見つけました。

クロマンタ<sup>1</sup>の調査を通して常に古代に思いを馳せている私は、瞬間「これはペトログリフ<sup>2</sup>だ」と直感しました。

「こんな山の中に。しかも露天風呂の堀垣に。こんなところに古代文明なんて聞いたことがない」

と、しばし不思議な線刻紋様を見つめ、湯舟につかりながらどこまでも深い山麓を見ては

「どうしてこんなところにペトログリフがあるのだろう。この山の奥に何かあるのだろう」

と、これから訪れることになる、未だ見ぬ神々の聖域に思いを巡らせました。

## 【出会い】

夜のコンサートは心配した雲行きもなんとか切り抜け、盛況のうちに終了。会場は暗がりではくは見えませんが、見たが多くの観客が集まり、音と光のページェントを楽しんでくれたようでした。

観客の中からステージに駆け寄り、「ごくろうさま」と声をかけてくれる人がありました。私は照明の具合でその人

---

<sup>1</sup> クロマンタ＝黒又山。秋田県にある古代人によって土木工事されたと思われる山

<sup>2</sup> ペトログリフ、またはペトログラフィ＝古代人が岩に描いたとされる紋様や文字

の姿をはつきり見る事はできませんでしたが、漂う雰囲気  
で誰であるかはすぐにわかりました。中仙町観光協会の高  
橋貞子さんです。

高橋さんとは平成四年からのつきあいです。高橋さんの  
住む中仙町は秋田民謡でも有名な「ドンパン節」の発祥の  
地として知られています。この中仙町で時報サイレンをド  
ンパン節のチャイムにするという計画があり、私が編曲者  
として打ち合わせに町を訪れたのが最初の出会いです。以  
来、チャイム設置や翌年の「第九回ドンパンまつり」での  
演奏など、つきあいは広がっています。

中でも、初めて訪れた中仙町の人々との交流や、中仙町の  
水神社すいしんしゃのご神体で秋田県内唯一の国宝「千手観音等鏡像」  
との出会いは私の作曲家として、シンセサイザー奏者とし  
て新しい分野を切り開く大きな影響を与えてくれました。  
そしてその鮮やかな線刻で千手観音が描かれている銀色の  
鏡は、私の念願でもあったファーストアルバムCDのジャ  
ケットとして生涯つきあうことにもなりました。

国宝をイメージした曲「鏡」の制作や国宝の写真を使用  
したCDジャケットの制作を通して、何度となく高橋さん  
と打ち合わせを進めてきました。高橋さんとのつきあいは  
CD完成後も、ドンパンまつり終了後も、常に話題を見つ  
けてはお互いがお互いの言葉に興奮しながら、地域活性化  
にとどまらず未知なるものへのあこがれの話に花を咲かせ  
ています。

## 【契機】

夏の終わりがごろ、私は高橋さんに妙の湯で見たペトログリフのことを話しました。高橋さんは私たちが血眼になって調べている鹿角市十和田大湯のピラミッドといわれている三角山「クロマンタ」にも興味があります。すぐさま目を皿のようにして話を聞いてくれました。

「田沢湖界限にもそのようなものが？」と興味しんしん。後日、高橋さんは妙の湯へ現場検証に行きました。高橋さんの熱っぽい説明のためか、妙の湯の女主人も興味しんしん。「私もそんな話が大好き。まさか自分の家にそんなものがあるなんて」と快く写真を撮らせてくれたそうです。

## 【連鎖】

このことから、高橋さんは妙の湯のペトログリフにとどまらず、田沢湖畔や西木村にしきむらなどの古代縄文の遺跡や、前九年の役・後三年の役にまつわる不思議な事から次々に掘り出しました。

まずは「水神社の鏡」。高橋さんは

「水神社の鏡は一枚じゃない。しかも発見されている数枚でもない。もつともつとたくさん鏡があるはず。地上にないとすれば地中か水中。しかも山形県湯殿山ゆどのさんに同じような例がある。水神社にも社前の沼に鏡を投げ入れて奉納する習慣があるにちがいない。」

といいます。さらに

「水神社の近くの豊岡といつところに小沼こぬまといつ沼がある。しかも水神社は以前豊岡にあったという記録がある。もしかしたら小沼の中に湯殿山と同じように大量の鏡が沈んでいるかもしれない。しかもこの辺は前九年の役で安倍氏を滅ぼした清原一族の本拠地。力のある豪族があるところには必ずそれを裏づける財宝資源があるはず。」

熱弁を聞いていると、「ウン。なるほど」とうなづくほかにないほど真実味がありました。さらに、関連する多くの縄文遺跡やストーンサークル、不思議な由縁のある神社や仏閣にも話が発展しました。

高橋さんとは昼となく、夜となく、仕事、プライベートト……そんなものを通り越して、地域の歴史、奇談話にいつも花をさかせるのです。私は鹿角市、高橋さんは中仙町に住んでいます。この間は車で約九〇分。もちろん電話でも話しますが、移動時間を惜しまずに会って話をすることもよくあります。なにしろ、写真や見取り図などを参照しながらの話が多く、どうしても電話では伝えきれないものも多いのです。

そしてついに極めつけの話が登場します。それはあまりにショッキングで、緊急な用件でした。

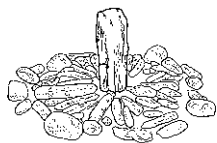


図 1: ストーンサークル (stone circle:環状列石) 新石器時代の遺構。立石などを直径数十メートルの円環状に並べたもの。日本では東北・北海道にみられる。(三省堂「大辞林」より)

## 【究極】

それは亨保二十年四月（一七三五）に久保田（秋田）の佐藤利兵衛によって書きとられたという『田沢嶋留尊仏菩薩縁起』に書かれている摩訶不思議な世界についての話でした。それを知った高橋さんは次の日まで待てずに、その夜のうちに私のスタジオに電話してきました。

「田沢湖畔にクロマンタに勝るとも劣らないミステリックフィールドがあります。古い文献を頼りに訪れた人もこれまでに何人かいます。地元の人には信仰の対象として参拝もしています。『仏おろし』といわれる巫女たちは修業の場として聖堂的にも崇拜しているらしいです。以前、何かの雑誌に紹介された写真も入手しています。これはすごいですよ」

私は、郵便で送ってもらった資料をもとに「水神社の鏡のこと」「妙の湯のペトログリフのこと」「田沢湖畔の不思議な聖域のこと」などを自分なりに整理しました。そして、歴史作家でクロマンタ調査隊のメンバーでもある鈴木旭さんに電話で連絡して今後の進め方などを相談しました。

鈴木さんは「それはすごいところだ。すぐに行つてこの目で確かめてみたい。クロマンタとは別な切り口で『大発見』になるかもしれないね」と話してくれました。私は、ただただ熱っぽく話すだけでそれ以上何をすることもできず「一刻も早く私が目で確認して写真を送ります」と約束して電話を切りました。

## 【仲間】

翌日、私は高橋さんに電話して近く現地を訪れたい旨を伝えました。その結果、地元の研究者や興味のある人たちが案内してくれることになりました。私はクロマンタ調査の地元機関として協力してくださっている鹿角市の十和田古代史研究会の中村三千夫会長に話を持って行きました。その結果、事務局長をつとめ、会員の中でも一際好奇心旺盛な瀬川博雄さんが同行することになりました。

瀬川さんはクロマンタ調査のノウハウを生かそうと、方位磁石のほかにGPS<sup>3</sup>を用意してくれました。私も周辺地図を広げては関連場所や気になる地名などをチェックして、可能な範囲で先入観のない視点で取り組むことができるように下準備を進めました。このような短かく慌ただしい準備期間が過ぎ、十月十三日、ついに田沢湖畔周辺の調査に向かう日が来ました。

## 【確認】

田沢湖畔の聖なる場所に行く日は十四日。私たちは妙の湯のペトログリフ確認も行動の一環と考え、宿泊を兼ねて前日の十三日午後八時に鹿角市を出発しました。約二時間後の午後十時に妙の湯に到着しました。妙の湯にはあらかじめ高橋さんから連絡が入っており、遅い時間にもかかわ

らず、私たちが玄関に入るとキッチンと二足のスリッパが揃えられて到着を待っていてくれました。

私は瀬川さんと「あざみ」という部屋に入りました。荷物を置く顔を見合わせ、「まずは見に行こう」と入浴を兼ねて、問題の露天風呂に向かいました。妙の湯の泉質は単純泉で四十二度。毎分三十四リットルのお湯が湧出しており、塩分の強い熱湯で硫化水素泉が勢いよく露天風呂に流れ込んでいます。皮膚病、リウマチ、創傷、湿疹、通風に効能があると言われています。

瀬川さんと私ははだかになって露天風呂に向かいました。初めて訪れた瀬川さんは「あつ。岩に何か描いてある」と、問題の岩に近づいていきました。私も言いだしつべとは言いながら「やっぱりペトログリフがあつたか」と再確認しました。私たちは「他の岩はどうなっているのだろう」と露天風呂周辺の石や岩を見てみると、予想通りいくつかの石に微妙ながら線刻紋様が描かれていました。

靈感というほどのものではないと思いますが普通の人よりもデリケートな感覚を持っている瀬川さんは、ふと露天風呂の向こうの暗がりを見て

「この向こうに何か不思議なところがあるんでしょうか。その間の中に何かが存在しているような気がします」

と、思わずゾツとするようなジョークをいいました。そんな怖い話をよそに、露天風呂につかりながら二人は翌日からの調査や田沢湖畔の古代文明やその遺跡についての話に花をさかせました。

翌朝、早々と起きた二人は「ペトログリフの写真を撮影して早めに出発しよう」と露天風呂に向かいました。露天風呂についた私たちは明るくなった景色を見て驚きました。そして前の晩、瀬川さんが「闇の中に何かがあるようだ」と話した場所には観音像が立っていたのです。私は観音



図2: 妙の湯のペトログリフ

像など神仏の類は、たとえ偶像でも不思議な気配を漂わせるものかとあらためて感じました。

## 【遭遇】

妙の湯の女将<sup>おかみ</sup>はおにぎりまで作ってくれて、快く私たちを送ってくれました。私たちはそのお礼にと鈴木旭さんが編集した書物「クロマanta・レポート古代日本ピラミッドの謎」をプレゼントしました。

妙の湯を後にした私たちは順調に目的の田沢湖開発セン

ター前に三十分前の午前八時半に到着。靴や軍手など山歩きに必要な身の回りの道具の点検を行いました。

ふと開発センターの中に入ると思わぬ人に出会いました。それは、あの夏の暑い日、その人の依頼でこの田沢湖に足を運び、その日が今回の探険のきっかけになったともいえる「田沢湖まつり」の責任者で田沢湖町観光協会の萌田さんでした。その時は、そんな因果関係よりも旅先で思いも寄らぬ知人に遭遇したことに驚きを感じました。

萌田さんとは、さる七月二十三日、田沢湖まつりに出演した時に会って以来でした。そしてそれを契機にこの探険が行われたことを考えると、よくもまあタイミング良く現れるものだなと不思議な因果を感じました。ともあれ、萌田さんとの再会を喜びました。そうこうしているうちに探険隊のメンバーが集まりました。その中には陰の仕掛け人でもある高橋さんの笑顔もありました。

出発前に田沢湖町公民館に集まり、総務課の田口<sup>たくちけんじ</sup>圏治係長から以前に撮影した写真を見せていただきながら概要の説明を聞きました。田口さんは

「見上げるような巨岩……人を圧倒するような光景……何かぞつとするような雰囲気……」  
とおそらくは、「ご自分が感じた通りのことを説明してくださいました。」

しかし、残念ながら現場を訪れたことのない私はその光景が想像できませんでした。すると田口さんは

「とくかく、百分は一見にしかず。話しや写真では伝えき

れない事が多いので、早く本物を見にいきましょう」「  
と立ち上がり田沢湖町公民館「ふるさと探険隊」のメン  
バーらと二台の車に分乗、高鳴る胸を押さえながら出発し  
ました。

### 【拝顔】

車はまず最初に戸谷倉稻荷神社の白狐おやぎ様に向かいました。  
そこには四十メートルもあるうかと思われる巨大な岩が  
そびえ立ち、その中腹に白い狐が両足をそろえて座ってい  
る姿が描かれていました。見るからに白い塗料を岩肌に塗  
りつけたような感じで、灰色の岩石に白い姿が浮き出して  
見えました。かなり高い位置にあるので、むろん白い絵の  
近くまで行くことはできません。説明によると不思議なこ  
とに外部から描いたものではありません。白い色の成分は  
表面だけではなく岩の奥深くまで達し、岩の反対側まで狐  
の紋様をしているといえます。

私は「まるで何者かが外から描いた物に見える」と思い  
ましたが、それは単なる想像で、真実は石質の違いによっ  
て現れる模様だということでした。その時点で私は、この  
一連の不思議空間は人工的な古代遺跡などではなく、それ  
以上、人間の小さな営みを超越した何か不思議な力によっ  
て引き起こされたもので、いわば神のいたずらとでもいえ  
るようなものであり、精神的、宗教的なものではないかと  
感じました。目もくらむような巨大な岩石の上から



図 3: 白狐様

「神はこうして自らの存在を示す」

「自然の素晴らしさを知り、また、恐ろしさを  
知ることが大事」

という様な無を言わせぬ巨大な力の言霊ことだまを聞いたような気がしました。次にすぐ近くの龍が住むという洞穴を見た後、国道から田沢湖方面に向かい石神地区の田んぼを横切り、木々がうっそうと生い茂る小道の中ほどの明神さまと呼ばれる青龍大権現せいりゅうおんげんに到着しました。

その入口付近からして薄暗く、神聖な場所と知りつつもなんと薄気味悪い場所でした。しかも参拝者に頭上から覆いかぶさるように突き出した龍の頭のような巨岩からは「声」とも「気」ともいえる音ではない何か、気配のような説明のつかない「うなり声」が常にに響いています。

そのうなり声は、時には低音で、時には高音で鳴り響き、耳には聞こえませんが、音としてではなく別の感覚として「何

やら騒々しいところだな」という記憶が残りました。

私は、もつといるいるな事を知りたいと思いつながらも、案内の人たちの足早な誘導でその場を去りました。が、何度も何度も振り返り、後ろ髪を引かれる思いでした。私は心の中で「近々、再度訪れることになりました」と語りかけながら次の目的地に向かいました。

一通り周囲の聖域といわれる場所を見学した後はいよいよ奥の院です。車から徒歩に切り替え、林道を歩く事約十五分。山奥のひっそりした場所に意味深げに建っていたのが鳩峰神社。はとみねじんじや

そこは「木漏れ日」「清流」「森林」「山の幸」が勢ぞろい。ミネラルやアルカリイオンが充満し、ささやかながら「楽園」のきざしさえかもしだしていました。表面的には「古ぼけた社」ですが、全体からつける雰囲気はさながら「浄土の入口」といったところでしょうか。

さしたる説明もなく探険隊は一路目指す奥の院おしよがつ。お諸仏さまに歩を進めました。道なき道を切り開き、山あり谷あり尾根あり崖あり。決して「散歩コース」ではありませんでした。案内のふるさと探険隊のメンバーが話してくれました「お諸仏さまは『こえどきは来るなど』ってしゃべってら（注・「お諸仏さまは『疲れて体調が悪い時には来てはいけないと』と話している）」と。

昼食の時間も忘れてしまっていたお昼ちかく、足下に時折石が見えるようになったと思つた直後、目の前に突然巨大な石が門を作っていました。

ふるさと探険隊は「ここだよ。ここがお諸仏さまです」と説明してくれました。大きな石の門を潜ると空を覆い隠すほどの巨大な岩がそびえたっていました。あまりの大きさに私はただただ、あんどり口を開けたままでした。

一歩一歩岩にはいつくように進んでいくと岩また岩。どうしてこんなところに突然こんな大きな岩がそびえ立っているのでしょうか。ここはいつたい何なんだろうと不思議でなりませんでした。岩そのものの存在の迫力やそこに描かれた異様な紋様。私のような精進の悪い物には直視することもできないほど神々しいような存在感でした。しかも足場が悪く、立っているというよりも斜面にへ張り付いているといった感じで、目の前の巨大な岩と自分を見比べると、情けないやら頼りないやら。まるでお釈迦様の手の上で暴れている孫悟空を思い出しました。

説明を聞きながら森の更奥にある犬鷲が羽を休めているように見える鷲岩を見てさらに先に進みました。私たちは巨岩にしがみつくように左に進み、ちょっとした平らな場所に落ち着きました。

そこには、あたかも巨岩の意志を表情として私たちに見せているような人の顔に見える岩があり、人間が岩にしがみつきながらお諸仏様に登って来るのをじっと見ているかのようにでした。

その異容は人間ともサルともいえない様相で、「巨大な石の顔」という点ではイースター石の「モアイ像」似ているということもできるでしょう。その石人像はいつのころ

からそこに鎮座しているのでしょうか。周囲には金属製の小さな鳥居や蝸燭うごく、寶錢箱さいせんなどが置かれ、かなり以前から信仰の対象となっていたことが伺えました。

大きく想像を超えた奇景には人工的な気配はあまり見られませんでした。しかし、石人像の形や目、鼻などの形状はとも自然のものとは思いがたく、異様なまでに平らであったり、人間が祈りを捧げるのに都合が良過ぎたりしている部分がありました。信仰の対象物として人間が加工したと思われる部分も確認できました。物言わぬ石人像は何のために存在し、我々に何を語りかけようとしているのでしょうか。

ひとしきりあちこちを見学して私たちは昼ご飯にしました。食後の歓談の最中にも、瀬川さんはビデオカメラを片手に岩に登ったり、みんなが行かないようなところに行つては映像記録に専念していました。

「さてつと。引き上げますか」という案内のふるさと探険隊の人の声で私たちはお諸仏さまを後にしました。

私は瀬川さんに

「どうしてこんなに寒いんだろう」

と問いかけました。瀬川さんも

「私もそれを考えていました。さきほどから何か急激に寒くなってきたような感じがします。異常な冷気ですね。あたりまえじゃありませんよ。おゝさむい」

と肩をすぼめていました。私も、昼食の時には脱いだジャケットをすっかり着こみ凍える手に軍手をはめて下山を始

めました。

するとどうでしょう。三十秒も経過しないうちに普段の暑さが戻り、着込んだばかりのジャケットをまたしても脱いでしまいました。

それにしても「あの冷氣」はなんだったんでしょう。私は「何も悪い事はしていないから戒められているわけではないはず」と一人思いしながら、以前この神聖な場所を訪れたことのあるミュージシャンの宮下富実夫さんが書いたレポートを思い出しました。宮下さんは「あそこに行くときのエネルギーがリフレッシュされて新鮮なエネルギーに交換されるような感じがする」と書いています。私は「この冷氣がそれなのかな」とも考えました。

なぜでしょう？ 到着時には「やっとついた。すごいデッサンな。ウワー。キヤー」と、はしゃいでいたはずなのに。目を疑うような光景に大感動してきたばかりなのに。不思議なことに、私はまるで夢でも見ていたかのように、頭の中の霧が晴れてしまったかのように、なんの興奮もなく、なんの感傷もなくその場を離れてきたような気がします。下山しながら心の中で「こんなあつけないはずはない。私の心の中で何かの整理が行われたんだ」と自分で確認しながら次の目的地へ向かいました。

## 【護衛】

お諸仏さまを後にした私たちは次なる目的地眠仏さまに向かいました。そこはうつそうとした森林地帯。足下には湧水なのか細い獣道にも水たまりができて歩きにくく、人間の出入りを避けているかのようでした。

入山して間もなく林道のすぐ脇にそれはありました。いまにも動き出しそうな海亀の形をした岩、亀石です。有名な飛鳥の亀石のように明らかに人間が石を削ったような感じは受けませんが、ここでも神と自然がこのような形を作ったとしかいいようのないほど神と自然がこのような形を亀は「今にも動き出しそうな」攻撃的で躍動的な様相をか



図4: 亀石

もしたしてします。なぜこのような攻撃的な姿勢をしているかは、そのすぐ先の眠仏さまと合わせるとすぐ理解できました。亀は眠仏さまを護衛しているのです。この光景を見て私は、静かな寝顔の眠仏さまとそれを守ってい

る海亀の深く、ものいわぬ信賴関係を感じ取ることができました。

外敵から仏様の護衛にあたる生き物といえどどちらかというところとか虎とか鷲などのようなどう猛な生き物と考えがちですが、なるほど仏様を護衛する亀が歯が立たない強い敵が現れた時は、山の上の犬鷲(鷲石)が数秒で飛来して亀を助けるのだと思います。山の上で休んでいるように見える鷲は、まさに「脳ある鷹は爪を隠す」のことわざ通り目を光らせて奇襲攻撃に備えているのだと感じました。

奇岩、奇景の探訪は眠仏さままで終点となりましたが、案内の人たちは車を反転させ生保内方面に向かいました。

私の車と一緒に乗っている瀬川さんは「え。まだ行くんですか」といい出しました。自分が好きで参加したツアーだったはずなのに「行きたくない。早く引き上げたい」といった疲れの表情がありありと顔に表れていました。私を中心の中で「自分で行きたいといってきていながらこの態度はいただけないな」と瀬川さんの突然の変化に驚きました。瀬川さんは何かを避けるように、あきらかに拒絶反応を示していました。

## 【怨念】

ついたところは車の音もざわめく道路わきの小さな祠姫塚。私は仏頂面の瀬川さんを誘って車から降り、案内の人についていきました。道路から細い道がつけられ、角には

「姫塚」と書かれた標柱も立てられていました。標柱には

「姫塚——平安朝時代、朱雀天皇のころ、天慶の乱（九四〇）に破れた平将門の娘滝夜叉姫はこの地に落ちのび、村の祖となったと伝えられている」

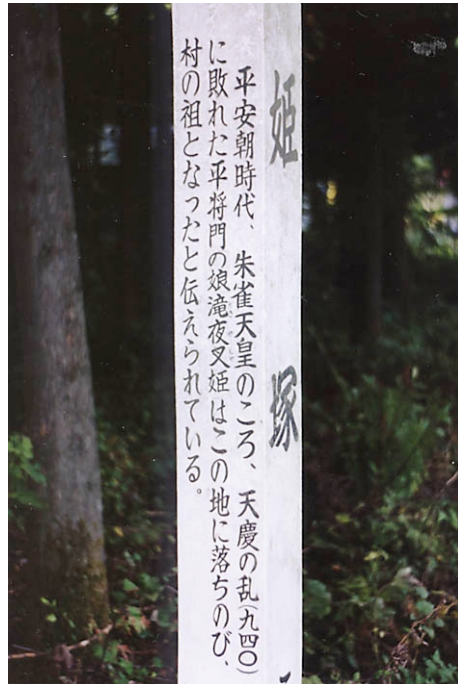


図 5: 姫塚標柱

と書かれていました。私は以前この話をNHK大河ドラマ「炎立つ」の原作者で知られる高橋克彦さんの口から聞いた事があります。

「鹿角地方に古くから伝わる『ダンブリ長者伝説』に登場する『天皇』とは現在の天皇家の祖先を指しているのではなく逆賊天皇とまでいわれた平将門のことを指している」という大胆な発言でした。私は目の前の姫塚の標柱を見ながら、「あの話は本当かも知れない」と感じました。そ

して標柱の解説をそっくりそのまま記録しようとする解説部分の撮影を行う事にしました。

となりにいた瀬川さんにも「ビデオでも解説を撮影しておいてヨ。後で見た人によくわかるように」と話し、ビデオ撮影をしてもらいました。これが後々私たちにいろんな疑問を投げつけ考えさせられる映像となってしまうました。

ともあれその間一分少々。そのころから瀬川さんは「何か急におなかが痛くなってきました。チクチク差し込むよくな」と腹痛を訴えました。私たちはそれにはあまりかまわずに、看板の奥の方にひっそり祭られている姫塚の祠に向かいました。

小型テレビほどの小さな石の祠の中には、かすかに文字が書いてあるのが確認できる小さな木札が二枚ま祀られていました。ここは以前、町の研究者たちが訪れた時に地中から長さ約十メートル、太さ約五十センチにも及ぶ白い大蛇が姿を現し近くにいた人に巻きついたという奇談が残っています。しかもその時の様子が写真にまで撮影され、その巨大な白い姿の不思議な物体が写った写真は今でも田沢湖町公民館に保存されています。

後日、ここで撮影した写真とビデオを編集したら、なんとその白い大蛇が映像のなかに現れていました。写真には何の異変も見られませんでした。痛むおなかがまんしながら瀬川さんが撮影したビデオには姫塚の標柱にまともにつく白い大蛇がしっかりと写っていたのです。

このビデオを見た関係者たちは、「蛇はこの地に人が侵入するのを嫌がっている。これらの現象は蛇が『ここから入ってきてはいけない』という意思表示をしているのだ」と話しました。私たちの探訪はこの時を契機に「ミステリー」から「オカルト」の世界にも迷い込んでしまったようでした。しかし、ほぼ同時に撮影したはずの写真にはなにも写



図 6: 標柱にまわりつく白い大蛇

らず、ビデオにだけ写っていたのは考えても不思議なことです。これら一連のことから、霊的なものにデリケートな瀬川さんが「行きたくない」と言ったり腹痛をおこしたりという急激な変貌ぶりも何となくわかるような気がします。

山吹の 華にも似たり 将門の  
 遣姫はねぶる 生保内の郷

と誰が詠んだか姫塚の滝夜叉姫を偲ぶ詩が盆踊りにうたわれ、村人の盆唄として残り、姫の怨念をなだめているそうです。

## 【基盤】

最後に訪れたのは四柱神社しじゅうしんじやこと荒霸吐神社あらかはばき。以前は純然たる荒霸吐神社だったのが一度は廃止され、さらに移動され、四柱神社として祭られていたのが平成四年に青森県五所川原市の大山祇神社おほやまじみ(荒霸吐神社)から九三〇年ぶりにご神体の返還が行われてからのことです。私は「東日流外三郡誌」に登場する荒霸吐神社が田沢湖畔にあることに唐突さを感じました。ともかく神社周辺からは縄文土器の破片などが出土し、ここには縄文の人間生活が営まれていたことを物語ってくれています。高度な古代文明を築いた荒霸吐文明。この余波がこの出羽の山中に存在する現実を目の当たりにしたような気がしました。

## 【終】

全ての探訪を終え、私は

「奇怪な景観を見せてくれる巨岩。不思議ないい伝え。突如登場する荒霸吐神社。古代日本の中心的文化が花開いたとも伝えられる東日流外文明。これらを整理していくと、ここにあるさまざま不思議空間はけっして一つ一つが単独で存在するものではない。何か大きな精神文化でつながり―神代の時代―神と人間が交わした交流の残像が残っていない」  
 という気がします。

この「田沢湖畔の謎と神祕に包まれた神々の住む聖域」に向けられた何人かの人の意識は、理屈やしきたりに束縛されることなく「聖なるもの」へのあこがれと冒険心が結集され、単なる「怖いもの見たさ」だけではなく、ひとつのものを中心にいくつもの意識や人間のパワーが集約され「人の輪」が形成され、ひいては地域のため。

参加した人はその人の大切な記憶として生涯思い出に残ることでしょう。

そしてこうして現地を訪れて参加者全員が「何か」を感じとったことは、仮にいつか肉体が滅び、意識だけが輪廻しようとも、きっとその意識どっしはお互いを確認しあい、この日のことを語り合うことでしょう。

## 【追記】

つれづれなるままに私の見たこと、感じたことを書き綴ってきたのですが、これまでに見たり、感じたり、体験した不思議な事からはこれで全部ではありません。えも言えぬ微妙な雰囲気や、まじめな顔で話したら多くの人に笑われてしまうようなキワ物の話もあります。さらに人によって感じ方も違うと思うし、また、別なタイミングの時は別の感覚でさまざまなものを感じ取ることができるのだと思います。

この不思議な聖域が何のために祭られ人々がどんな祈りを捧げ、現在の私たちの生活にどのように関連づけられる

のかなどを総合的に検証するプロジェクトも組織されつつあります。私たちは、この神々の聖域を荒らすことなく検証を深め、先人の知恵や隠されたメッセージを読み取って行きたいと考えています。そして、そこに集まった人々の結集された未知なる「力」を感じ取りたいと考えています。

最後に、察するに、この聖域は確かに神々の住む聖域です。むやみに接したり、調査といつつ乱暴にあつかうことがあれば、必ずや神々の怒りにふれることと思います。また、精進して望めば逆に、必ずや私たちを光りある幸せな方向へ導いてくれるものと確信します。

## 第二章

# 田沢湖畔の人工建造物

### 【拡散】

「たざわくるそんぶつぼさつえんぎき田沢鳩留尊仏菩薩縁起」に伝わる田沢湖畔の奇岩、奇景。私が実際に訪れて散策した感想は、

「こんな巨大な石塔が、まさか人工的なものとは考えられない」

でした。イースター島の「モアイ像」など、「人工のものかな」と思えるものと比較して、田沢湖畔の奇岩ははるかに巨大でした。

しかし、すべてが人工的なものでなく、天然に存在する巨岩を信仰の対象として人間が手を加え、より神々しく、具体的な形に加工したことも十分に考えられます。えも言えぬ奇妙な石や岩。私は会う人ごとにこれらの写真を見せて「何に見える？」とたずねてみました。その問に対して「人の顔」や「猿の顔」などと予想通りの返答が返ってくる度に、私は「人工加工説」の感を強めていきました。

そして、これまでコメンテーターとしてアドバイスをくれていた歴史作家の鈴木旭さんに一連のカラー写真を郵送しました。

鈴木さんは十月三十一日に鹿角市立大湯体育館で開かれる「クロマンタ・シンポジウム」で講演するために、二十九日の夜遅く鹿角市入りしました。

私は鈴木さんに早く会って詳しい説明をしようと思いい、三十日に鈴木さんが宿泊している同和鉱業大湯保養所に向かいました。そして、シンポジウム終了後の予定や田沢湖畔探索のスケジュールを打ち合わせました。

翌三十一日、シンポジウムが終了し、私たちはすぐさま田沢湖へ向かいました。

## 【潜入】

私たちの車は二台。一台は、鈴木さんに乗せた私の車。もう一台は東京からやってきた三上<sup>みかみたけはる</sup>文晴さんの車です。三上さんは学習研究社の記者で、奇妙な出来事を専門にあつかっている雑誌、月刊「ムー」の編集部に席をおいています。二台の車は無線機で連絡をとりながら、激しくふる雨の中を田沢湖へと向かいました。

途中、食事をしていく予定でしたが、あまりに激しい雨のため、車から一步でも出るとビショ濡れになるおそれがありました。晴れ間を待ちながら走り続けること二時間。私たちの車は西木村を経由して早くも田沢湖畔を走ってい

ました。やっと晴れ間が覗いたと思っただら目的地は目前。食事よりもビールを買い込み、今夜の宿泊先の田沢湖高原水沢温泉郷「椿荘」に到着しました。

部屋に荷物をおいた私たちは、まずは温泉で体を温めようと浴場へ行きました。東京からきた三上さんはワイシャツにブレザー程度の薄着。雪でも振り出しそうな晩秋の冷え込みはこたえたようです。「寒い。寒すぎる」と冷えた体を温めていました。一方、東北に慣れている鈴木さんは寒さに備えての重装備。これしきの寒さには何ともない様子でした。

風呂からあがった三人は、翌日からのスケジュールの打ち合わせを始めました。買い込んだビールとおにぎりやサンドイッチを食べながら、見聞の順番、現場でのアプローチの方向など念入りに話し合いました。

打ち合わせは佳境に入り、奇岩や地名として名づけられている名称や、田沢湖をベースにそれぞれが存在する位置関係、古くから地名として残っている名前の関連性など、現在までの知識を越えて仮説論的なものへと発展していきました。

そのとき突然、鈴木さんが苦しそうなうなり声を上げました。驚いて「鈴木さん。大丈夫ですか？」と問いかけると、鈴木さんは「ムニヤ、ムニヤ……」。なんのことない。自分のいびきに自分で驚いて奇声をあげたのでした。

鈴木さんのけたたましいイビキと戦いながら迎えた朝は、雨模様ながらの前日ほど激しいものではなく、時折晴れ間

も見えました。朝風呂の後、民宿風の食堂での朝食を済ませると、私は案内をしてくれる田沢湖町や中仙町なかせんまちの人たちに電話連絡をとりました。

まずは、宿泊した椿荘に勤める草剪俊一さんくさなきしゆんいち<sup>4</sup>が出勤を兼ねて到着。草剪さんと椿荘の人たちから地域的なことやこれまでの出来事を取材しました。

やがて、約束の八時半になるとその他の関係者が集合しました。いつもと違い、歴史作家の鈴木さんを案内して現場を訪れるのですから、スタッフ達には緊張があります。

出発にあたって私たちは長靴、軍手、方位磁石、地図などのほかに、鈴木さんからの要望があつたバケツ、たわし、デッキブラシを用意しました。むろん、お清め用のお神酒みきよと塩も忘れずに用意しました。

## 【巨龍】

最初に訪れたのは「青龍大権現せいりゅうおほいけんげん」。

生保内おほほない・田沢湖の交差点から田沢湖方面に向かい、見落としがちな細いあぜ道を右に入り、田んぼの中を走り抜けるとうっそうとした雑木林につき当たります。そこを左折し、大きな石が置いてある角を右に入ります。すると間もなく、朽ち果てた鳥居の前に出ます。

<sup>4</sup> 前九年の役で源義家が田沢高原を超える時に、案内役を「クサナギ」の一門に託したが、草剪俊一氏はその末裔にあたられる。

編注 本来は剪に弓偏が付くが、編集システムの都合上略字を用いた。

私たちはそこで車を止めて、巨大な龍が口を開けて横たわっているように見える「青龍大権現」に近づきました。鈴木さんたちは開口一番「何だこりゃ!」。私が思っていた通りの反応でした。



図7: 青龍大権現

頭上高く迫り来る岩は例えようもなく異様な姿をしています。私は用意してきたお神酒と塩を社と岩の周辺に捧げ「人間がうつろします。どうかお許し下さい」と祈りました。

さっそく鈴木さんは「上に登れますか」と、聞くが早いか龍の首のあたりを登りはじめました。私も一緒に登り、二人は龍の背中に乗るような格好になりました。

見渡せば龍の背中が延々と続いています。鈴木さんは「この龍はどのくらい長いんだろう」と、龍の背中を下りて今度は尻尾の部分に相当する方向へ向かいます。

用水路工事の跡でしょうか。途中、龍の腹の部分を作り

ぬいて水道が満々と水をたたえて流れています。その先も龍の胴体は長々と続き、尻尾の部分はまるでソフトクリームのようにトグロを巻いた小高い丘になっていました。その丘からは裾広がり美しい滝が流れています。その滝は龍の胴体部分のなだらかな岩肌を無数の白線を描いて流れ落ちていきます。

鈴木さんは

「この高い丘の内部がどんな形の岩になっているかが問題だ。もし龍の尻尾がトグロを巻いているような地形だったら大発見。表面の土砂を取り除くことができれば大なる龍が現れるかもしれない」

と胸を躍らせていました。そして、アメリカ・オハイオ州にある数百メートルにもおよぶ「大蛇の塚」を例に説明してくれました。大蛇の塚は、小さな丘が続いているような何の変哲もない地形ですが、頭部分はおおきな蛇の頭の形を、尻尾部分はトグロを巻いた形をしており、高い位置から見ると大蛇が口を開けて尻尾を巻いている浮き彫りの絵になっています。

私たちが目の前にしている巨大な龍の形をしていると思われる岩はいったい何を意味するものなのでしょう。かなり以前から信仰の対象として多くの人々が訪れており、今も龍の頭の前にある「明神さま」には夜な夜な願かけの人々が訪れて祈りを捧げているといわれています。

「丑寅日本記」の「姫塚白蛇伝」や「陸奥史風土記」の「将門遺姫楓之哀伝」には

「〜ときに辰子生保内郷たうこおほないむらにあり、世をしのびて石尊寺せきそんじに住みて楓姫かえでひめを生みにけり。然るに楓姫しか生まれ乍ながらに病弱なまがにて十三才にして生死をさまよう重病したりしに、母辰子、是を田沢湖石神いしのかみに祀まつらるる青竜に、娘楓の延命を志願しければ、湖より白髪あらかわの仙人あらかわ顯あらわれ辰子の身みを生贄いけにえに望みて叶かなふると告げたば、即座に辰子田沢湖に身を投じたり。〜」

と書かれています。

この、奇妙な由来が伝えられる青龍大権現は見るからに迫力があります。それもそのはず、「仏おろし」を行う巫女は皆、青龍大権現に詣でて霊界との交信能力を身につけるのだそうです。

この仏おろしとは、いわゆる「イタコ」です。死者との交信ができるとされていて、田沢湖畔の生保内地方おほないに古くからの風習として現在でも残っています。

私たちは巨大な龍の角の合間から月が昇ってくる神秘的な光景を想像しました。

## 【神籬ひせろみ】

ひとしきり青龍大権現の周辺を歩き回り終え、鈴木さんはこれらの調査で必ず問題になると思われる項目を出し始めました。「この龍はどこを向いているんだろう。拝むとすればどこが拝殿だろう」

私は、道路に突起した妙な石を思い出し、みんなを案内しました。

それは青龍から数十メートル離れた場所で、「明神さま」の境内の外にあたるのでさほど重要視されていませんでした。それはまるで矢印の頭部分だけのような三角形の石で、地上に露出している部分は一メートルほどです。地中の部分がどの程度の大きさなものなのかはさだかではありません。

以前、鈴木さんは私が見送ったこの石の写真を見て、「表面に何か重大な場所を示す形が描かれている」と話していました。そこで、実際に確認してもらいました。

その結果、「F」「¥」に似た形がはつきりと彫り込まれていました。鈴木さんの話によると、この形は「神籬ひもぎ」<sup>ひもぎ</sup>と

いって神聖な場所を示す内容のものだそうです。この場所も確かに聖なる場所として、民間の信仰や巫女の修業の場として活用されています。はたして太古の昔、この巨大な龍に見える岩に、人々は何を祈り、何を得ていたのでしょうか。

さらに鈴木さんは青龍からその三角石までの正確な距離を測定しました。

「三十三メートル」

その石を入念に調べるため、持参したデッキブラシで表面の土や苔を取り除きました。するとどうでしょう、ブラシがけの後タワシで表面のクリーニングを行っていくうち

に、石の表面一帯に奇妙な紋様が描かれているのが浮かび上がってきました。その量たるや！まるで古代の経文でも見ているかのようなでした。表面はもちろん、わずかに地中に埋まっていた部分。石の背中側。その石が「ただものではない」ことが徐々に確認されていきました。

さらに興味深いことは、それらのかなり古い時代の彫り傷のほかに、つい最近つけられたと思われる傷があることです。

これは、あきらかに最近つけられたものです。道路に突出した石がじゃまで、移動しようとした時についたものと思われる。ツルハシか何かのような道具で掘り起こそうとしたものらしく、地面と石との境めあたりに多く見られます。しかし、石がそのままの場所にあるということとは、簡単には動かなかったことを意味しています。

私たちは

「この石はいつたいどのくらい大きい石なのだろう。何を意味するものだろう」

と考え、青龍の謎は深まるばかりです。私たちは、何かヒントはないかと周辺を歩き回りました。

## 【拝殿】

私たちは、ここまでの道のりや周囲の状況から、近くに川が流れていることは知っていました。私は雑木林ごしに川の方向を眺めてみました。すると、雑木林の暗がりの中

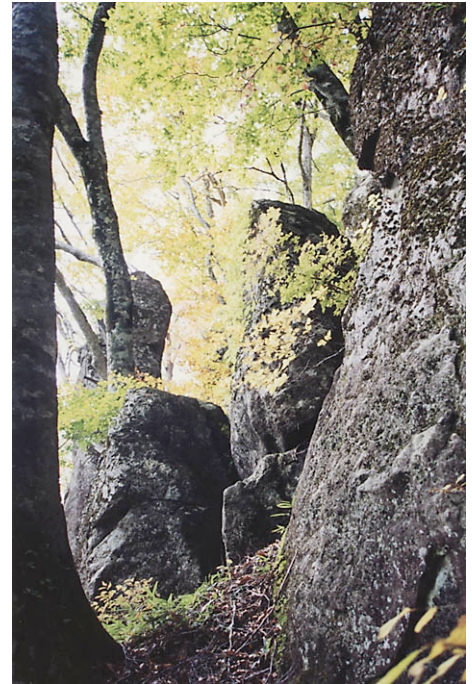


図 8: 巨石群

に長さ一メートルを越す巨大な石がゴロゴロしているではありませんか。

私は直感しました。それを確かめるために、巨石の散在している場所、三角石、青龍大権現の三か所を線で結んでみました。

「ヤツパリ」

私の心臓は驚きと興奮で鼓動が早鐘のように鳴り響きました。その三地点は見事に直線状に並んでいました。

すかさず鈴木さんは、メジャーを持った人たちに三角石から巨石までの距離の計測を依頼しました。雑木林の中であつてメジャーをまつすぐあてがることができず、計測にはしばらく時間がかかりました。

暗がりの中のメジャーの数値を読み上げる声が雑木林に響きました。

「三十三メートルです」

私たちは「ギョツ」として、つい先刻聞いた「三十三」の数字を思い出しました。

「この三十三メートルという距離の一致はいつたいどんな意味があるのだろう」

目の前の巨石群は「お諸仏さま」の巨石群とは少し雰囲気の違い、細長い形の「立石」が散在しているのではありません。円形、あるいは「鏡もち」のような丸型の石が多くあります。しかも、いくつかが積み重なったように見えるものもあります。

また、巨石があたかも「コ」の字型に配列され、まるで「その石囲いの中で何かが行われた」ような気配さえありました。そして何よりも注目すべきは、石垣の中から見ると三角石と青龍大権現が同じ方向にあることです。

私たちは目の前にある奇妙な石の配列を見て、それぞれが互いに関連性のあるものかもしれないと考えました。例えば、青龍が神殿ならば、目印となる三角石を中央にして、巨石で形作られた拝殿があるとも考えられます。

この奇妙な数字と、配列は鈴木さんの関心をさらに強めました。鈴木さんは

「次回は三角石の紋様を拓本で標本をとり何を意味するかをさらに研究したい」と話していました。三上さんも

「これは変です。妙なところですね。川が近いから天然の石でしょうが、この巨石群は普通じゃないですね」と異様な光景に驚いていました。

さらに、案内してくれた地元の歴史研究家たちから興味深い話を聞くことができました。

「玉川がダムによって水量が調節される以前は、この辺一帯が川の中だったんです。この巨石群がそのころからあったとすれば、石が重なっている部分だけが水面に出ているでしょう。玉川は頻繁に氾濫する川として古くから伝えられています。川が氾濫した時は青龍も川の中。しかし青龍はこのとおり見上げるほどの高さがありますから、ちよつど巨大な龍が川の中で泳ぐ光景がで上がったことでしょう。今ではその光景は見る事はできませんが、小さな島のごとく川に身をくねらす巨大な龍の姿は人々の崇拜を受けたにちがいありません。そして巫女は龍の頭上に上って、濁流が静まる事を祈り続けたのでしょつ」

そういえばフランスに似たような遺跡があります。聖ミカエルが降り立ったとされるル・モン・サン・ミシエルの岩山です。円錐形の岩山は普段は陸続きで歩いて行くことができますが、満潮時には四方が海に囲まれて船がないと渡れない周囲と完全に切り離された聖地と変わります。この不思議な光景が玉川河畔の青龍大権現にもあつたのではないでしょつか。

## 【支流】

しかし、その巨大な龍のモニュメントの胴部分は農業用水路が作られています。胴部分に直径一メートルほどの横

穴があけられ、さながら龍の胴を貫通するかのようになり、農業用水が田畑に流れ込んでいます。その流れは田沢湖町を流れる一級河川の玉川と平行して流れ、「龍神が住む」と伝えられている薄暗い川の上流、「龍神の祠」の前に出ます。龍の祠の入口付近は子供が入り込めるほどの大きさですが、一メートルも進まないうちに狭くなり、しかも岩がせり出してとても人間では入ることのできない岩穴です。その穴が二メートルほど入ったところで右に曲がり、さらに奥に続いています。地元の話では、まだまだ奥が深く、曲がりくねっているそうです。入口一帯には、カップの淵のように異様なほど澄んだ水が流れています。

そこは、ちょうど迫り出した道路脇の崖下部分にあたり、道路からは見えません。その淵を見るには道路から河岸に降りて、足場の悪い、川の脇を通らなくてはいけません。河岸整備された現在でも、そのような場所ですから、古代に於いては、一般には人が近づくような雰囲気ではなかったと思います。人も近寄らない、暗く、じっとりとした、透明な水が流れる淵……。これこそ龍が住むにはうってつけの場所でしょう。

さらに驚くことに、水路の流れは、岩肌に「白狐」が描かれているように見える「戸谷倉稻荷神社」まで及んでいます。「龍が淵を泳ぐ様子を眺める白狐」。まるで神話や寓話の世界にでも登場しそうな不思議な光景です。

<sup>5</sup> 若手県遠野にあり、作家柳田国男の「遠野物語」でも知られるカップが住むと言われる場所。

## 【人工壁】

天然の石質の違いによって、あたかも白い狐が行儀良く座っているように見える「狐姿岩」きつねすがたいわは三〇〜四〇メートルもある巨大な崖に描かれたように存在します。この白狐は外から描いたものではなく、「岩の成分の違いからできているらしい」ということを地元の研究者たちから説明されました。

それなりに納得したつもりでしたが、不思議な事はそれだけではありません。この見上げるほどの崖は一枚岩にも見えませんが、ところどころ大小の岩が突出しており、あたかもアスファルトかコンクリートで固められたような印象を受けます。

しかも古くからの言い伝えによると、岩はどんなに大きな地震がきても崩れたことがないそうです。鈴木さんはそこに注目しました。異様なまでに垂直で、しかも表面が固められた岩肌を見ながら

「これだけ巨大なものを人が作ったとは思えないが、削った可能性はある。岩の下の部分にも岩のかけらが散乱しておらず、崩れた形跡もない。白狐は自然のものだとしてもそれが描かれている岩を削ったり固めたりして整備した可能性はある」

と人工加工説を見い出しました。

さらに奇妙なのは神社です。地名になっている「戸谷倉稲荷神社」という名の神社は発見できませんでした。地元の人たちもそのような名の神社の存在を知りません。代わ

りに、岩の上り口に「岩倉神社」という意味深な名前の神社がありました。

岩倉神社には奇妙なことにアンモナイトの化石の様なものをご神体として祀られています。また、奉納された旗には「白龍」と記されていました。本来ならば「白狐」と書かれても良いはずなのに、突然「龍」とは。これまた奇怪な奉納物でした。

そして周囲とどのような関連性があるかはわかりませんが、近くの「龍の祠」の上あたりにご神体らしきものが何も祀られていない奇妙な社がポツンと立てられています。私たちは持参したお神酒と塩を捧げ、今では荒れ果てて参拝する人もない社に手を合わせ、無事故で調査活動が成功することを祈りました。

## 【安倍一族】

最後に鈴木さんを荒覇吐神社に案内しました。この神社はつい先頃までは四柱神社と呼ばれていましたが、平成四年八月からもとの名前である荒覇吐神社に戻りました。

ここで荒覇吐神社について説明しておきましょう。

向生保内の相内端あいなばたをすぎて相内沢川あいなざわを越え、すぐ左手に入る道があります。そこを入ると左の山の麓に荒覇吐神社の鳥居が見えます。この神社の左手には清らかな沢水が流れ、付近からは縄文土器の破片が多く出土し、縄文人が生活していたことを伺わせます。

荒霸吐神社は青森県の石塔山荒霸吐神社を本山とし、全国的な広がりを見せている神社です。この神社はNHK大河ドラマ「炎立つ」(高橋克彦原作)で知られる前九年・後三年の役に深く由来しています。

前九年の役(一〇五一〜一〇六二)で源頼義に滅ぼされた安倍一族が生保内(田沢湖町)に築いたとされる生保内城の城神・荒霸吐太郎権現を祀った神社とされています。ところが、実際には太郎権現は祀られていませんでした。

最近になって、田沢湖町史編さん室の佐藤忠治室長が、安倍一族にゆかりのある青森県五所川原市の和田家から出た古文書の中に

「四柱神社に祀られていたご神体は敗走する安

倍一族とともに東日流つが青森県るの石塔山荒霸

吐神社に移管されて祀られた」

という記事を発見しました。

佐藤室長はじめ、四柱神社の氏子など関係者が石塔山荒霸吐神社と交渉したところ、ご神体の一つが返却されることになり平成四年八月八日、約九三〇年ぶりにご神体を迎える「遷座式」が行われました。

荒霸吐神社とはこの様な経緯を持つ神社です。

鈴木さんと私たちは、神社の拝殿に入りご神体の写真を見たり、神殿の奥にご神体とともに配されている「はにわ」や不思議な様相をした木彫りの人形などを観察しました。学研の三上さんは神殿の「はにわ」を一目見て「これはレ

ブリカでしようね。表面が新しすぎますから」と多くの見聞によって得た知識からの意見を述べました。

鈴木さんはいえ、神殿の内部もほどほどに神社の建っている地形をしきりに気にしていました。

そこは、緩やかな斜面で大きな凹凸もなくまるでピギナー向けのスキーゲレンデを思わせる斜面でした。神社はその麓に建っています。

鈴木さんは

「この神社は仮の場所で、山の頂ぎに本殿があるはず。もし中世の城跡があるとしてもその下にはもつと古い遺跡が埋まっているはずだ」と話しました。

この場所は田沢湖町生保内字田向おほないあざたむかい、通称・増森とよもりといい、九三八年頃に荒覇吐神社とともに生保内柵おほないのさくが築かれました。四柱神社から山頂までは四三〇メートルあります。地元研究家らの調査によって、山頂には中世の馬場跡や本丸跡などが確認されています。また、同時代のものか不明ですが、大小九カ所の竪穴も確認されています。

奥州藤原四代に深く関与する安倍一族が、どのような因縁で田沢湖畔と関わりあったのか、今後の調査が期待されます。

安倍一族の子孫とも言われる秋田孝季氏たかすえは文化二年八月に「秋田生保内館のこと」と題して生保内柵のことを

「厨川くつがわから雲石うんせき、橋場を通り、国境の国見峠

を越えたところを生保内という。この所に城柵

を造つたのは北浦六郎安倍重任しげとうで、厨川大夫安倍貞任さだとうの命令で築いたものである。もともと隠れ城として築いたもので、世間あまり知られることもなく、秘に今の世までその跡を残してきたものである。館の屋敷は三町歩あり、敵を防ぎ味方を守るに便利な、固い守りの場所である。かつては平永衡たいらのながひらがここを攻めて敗れ、討ち死にした処でもある。この地はもともと安倍頼良よりよしの領有地であつたところに城柵を造つたもので人々はこの館を生保内城と呼び、又別の名を馬隠しの砦とも呼んでいた」

と書いています。

地元研究家の話によればこの「馬隠しの砦」は、山頂部分がすりばち状にくぼんでおり、城はもちろん、人々の暮らしても、もちろん馬が飼われて馬場を走り回る様子も、麓からは見えなかつたと説明しています。

## 【旅のおわりに】

こうして、私（達）の不思議な旅は奇怪な巨石遺構や伝説の生物などを総ざらいしながら、ついに東北の黄金文明でもある平泉藤原四代のルーツまで辿り着きました。

この東北（蝦夷）の歴史に見えかくれする奇妙な物事はいつたい何なのでしょう。現実に戻りながらも、思い返すとやはり「夢か現か……」と自問自答してしまいます。

おそらくは、この空間に足を踏み入れた人でないと「それ」は理解できないことでしょう。

このレポートを読んでくださった、あなた……。今度はご自分で、確かめられることをお勧めいたします。

### 【霊現象】

この荒覇吐神社にまつわる奇妙な話を二つ紹介します。

一つは平成四年五月二十三日のことです。

ある日、田沢湖町公民館総務係長の田口圀治さんが田沢湖高原水沢温泉郷「椿荘」の食堂にいと、突然見知らぬ男が

「そこに居る方の中に四柱神社に関わる方がおるはずなので話しを聞いてもらいたい」

と告げました。

田口さんが行ってみると、岩手県下閉伊郡山田町の日蓮宗・善慶寺住職三浦恵伸けいしんという人がいて

「田口圀治様。四柱神社の神よりお告げの言葉があります。聞いていただきたい」

とのことでした。お告げとは

「私は四柱神社の神ですが自分の名前は分かりません。部屋（神殿）が暗くお参りに来てくれる方も誰か分かりません。どうかご神体を奉っている部屋を明るくして下さい。そうすればお

参りに来てくれた方もわかりますので祈りも聞いてあげる事ができます。

また、神社の裏には昔から亡くなられた方々の霊が浮かばれずに彷徨っているので、神社境内のどこかに慰霊塔か供養塔を立てて拜んで頂きたい。

この度、ご神体が帰ってくるそうですのでご本尊様を中心に、私たちは一緒になってこの地域の皆さん方が病気にならないように、地域が栄えるように守ってあげます」

というものでした。

早速、田口さんは四柱神社の関係者にこの話を伝えました。すると、関係者の皆さんはその話を信じ、神殿のある部屋に窓や照明器具を取り付け、また境内に供養塔を建設しました。

後日行われたご神体の授与儀式の後、さらにお告げがあり

「私は荒霸吐太郎権現といいます。この度は氏子の皆様、私のためにこのような沢山の方々がお出でになり喜んで頂きありがとうございます。これからは地域のために、皆さんが病気にならないように、そして、この地域が繁昌するようにお祈りします」

と述べたといえます。

二つ目は、私の体験談です。

平成五年十一月十一日。学研からレポートの依頼があり、「姫塚」についてより細かい取材を目的に再度田沢湖畔を訪れました。案内は田沢湖町公民館の田口さん。

田口さんは「自宅に多くの資料があるから」と、神社近くのご自宅に私を案内し、膨大な量の資料や写真を提供してくれました。その後、田口さんは「荒覇吐神社は一連の要になっていると思う」と話し、神社に私を案内してくれました。

田口さんは同神社の氏子を勤めていることもあって、神殿の鍵を開けて中のご神体や周辺の奇妙なはにわなどを近くで見せてくれました。

私は、ご神体を見た後、鈴木さんが言った「山の上の本殿」の事を思い出し、田口さん「

「ここは仮の姿なんですよ。山の上には本当の本殿があるんですよ。それにしても独特の地形ですね」と問いかけました。

そのとき、今まで拝殿を照らし出していた電灯が、スーッと消えました。私は外を見ながら話していたし、田口さんも拝殿に背を向けて神殿をのぞき込んでいたので、すぐには気がつきませんでした。

気づいた私が田口さんに伝えると、「確か、電気はついてたはずだよネ」といいます。暗くなった拝殿に戻ってみると、やはり、点いていたはずの白熱球は消えています。「球が切れたのかな」などと話ながら、私が電球に手

を伸ばしてスイッチを操作してみました。点く気配はありません。そこで、一旦電球をゆるめ、また閉め直しました。それでも点灯しないので、「球切れだな」という結論になりました。あきらめた二人はまた神殿に戻って中をのぞき込みました。

しばらくすると、私たちの背後で白熱球がスツと点灯したのです。接触不良なら電球をいじくり回している時に点いてもよさそうなものですが、約一分経過してから再び点灯するという、妙な間隔が不気味さを漂わせました。

氏子を勤める田口さんの顔にも、さすがに恐怖の表情が現れていました。田口さんが気味悪く思ったのも当然ですが、何よりも震えあがったのは電球を確認した本人です。思わず身震いし、鳥肌が立ちました。

このところ「神のお告げ」に遭遇することの多い田口さんは

「きつと荒覇吐の神が以前の暗かった神殿を見せたかったのかも知れませんかね。」  
と語りました。

帰り際、田口さんは「田中さん、今日は特別に運転には注意して帰って下さい」と精進を呼びかけてくれました。神社を離れる前に、私は

「お騒がせいたしました。決して悪気はありません。お気を悪くされたのでしたらどうかお許し下さい」と  
と神社に向かって一際強い祈りを捧げました。

## 【白蛇出現】

十一月十一日。

この日、私が町を訪れたのは、「姫塚」についての詳細な取材をするためでした。この姫塚は平将門たいらのまさかどの娘・滝夜叉姫たきやしやひめが眠るとされている小さな塚です。この塚には古くから「白蛇出現」の伝説や御守りの木札に姫の顔が浮かび出してくるという摩訶不思議まかふしぎな伝えがあります。

私は、現場取材や関係者からの情報収集で、「白蛇出現」と思われる三枚の奇妙な写真を入手しました。このいきさつの一部分は第一章で紹介していますが、具体的な写真な

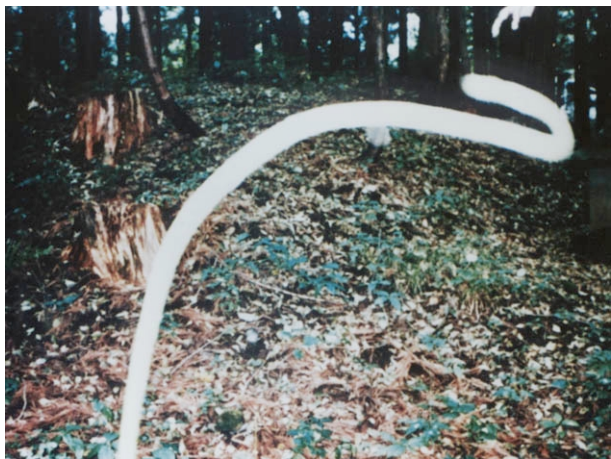


図9: 空中を舞う白い物体

ど詳細は学研が出版している月刊「ムー」一九九四年二月号に取材レポートを提出しました。もちろん三枚の奇妙な写真も掲載されています。

この写真には伝説の「白蛇」とおぼしき奇妙なものが入っています。三枚と

も違う人が違う時に姫塚で写した写真です。

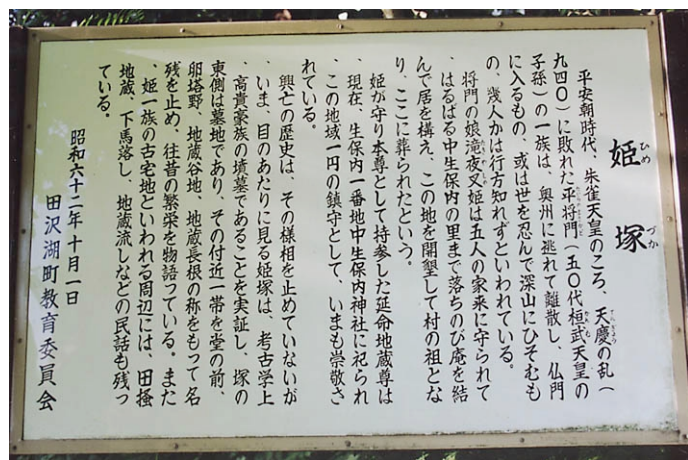


図 10: 姫塚案内板

一枚目は「実際に目の前の空中を白蛇が舞い、撮影者に巻きついた」とされています。二枚目は「見た事のない白い蛇のような草花を撮影したつもりだったがそれに白蛇の胴体が写っていた」というもの。もうひとつはビデオです。「姫塚の標柱に白蛇はまわりついて、しかも少しずつ二ヨロニヨロと柱から下りてきている」というショックキングな映像です。

こうして姫塚の一連のミステリーは、これら決定的ともいえる物証写真で一つの頂点を迎えました。俗にいえばこれらは心靈写真でしょうが、決して「恨み」とか「呪い」とかというものではなく、伝説の霊が姿形を変えて今の私達に語りかけているのだと思います。現実にもその場所はうつつそつとした茂みではありませんが、いとも穏やかな暖かい靈気をかもし出しています。

安産の守り神：…ひいては恋愛、夫婦円満：…などに深く由来していくと考えます。

現に私も、これら一連の神仏に触れ、数々の大願を実現することができました。

この世のものでない霊：…。彼等と暖かいコンタクトを交わすには、大願を成就することなどではないでしょうか。そうすることによって「守られた：…」という信頼関係も芽生えるのではないのでしょうか。

最後に、「姫塚白蛇伝」によれば

「…此の塚に花香をたむける人には白蛇の相を

見ゆあり。是れを眼にせし者は富み、子孫に慶

事多し」

とあります。現に、毎日のように家族の幸せや、元気な子供が生まれるようにと願う参拝者が絶えません。ことに女の赤ちゃんが欲しいという願を聞いてくれると評判で、女の子を欲する夫婦やめでたく女の子を授かった夫婦が入れ替わりに訪れています。霊感あらたかな場所として地元の人よりどころになつていいるのです。

## 【展開】

これらのファンタジック・フィールドは私たち鹿角市の物好きグループから歴史作家の鈴木旭さんを経て、考古学、民俗学、博物館学などの分野へと大きな拡散・展開を見せ

ています。そして、その周辺の航空映像などの空からの調査に協力してくれるマスコミ各社も現れています。

これら神々の聖域に対しては、その場所を汚すことなく一歩離れた位置から見聞を深めています。神秘のベールを透かしながら、その内側をかいま見ることができる日もそう遠くないような気がします。

# おわりに

この文章を書いて以来、私の心の中にはいつも「石の神」が存在しているような気がします。それは、様々な現象も伴うリアルなものです。私のスタジオには大きな水晶が二個置いてあり、埃が付くと不思議に私の体調も乱れてきます。そして、気分一新したい時に水晶を水洗いしたりすると身も心もすっきりします。これは、周辺の整理整頓とは少し違います。確かに、机の上などを整頓するとすっきりすることは確かですが、電話の相手の対応がよかったり、心配だった交渉が無事に済んだりと、ただの整頓とは少し違う現象も確かにあります。しかし、これらは第三者の確認がとりにくいので、みなさんも「ただの偶然だよ」と言われるのでしたら、それはそれで、これ以上の説明はできません。

しかし、紹介した摩訶不思議な世界はこれを読んでいただいたあなたにも確認してもらうことができます。そして、体験してもらうことができます。

これまで、私が十年以上にわたって研究、調査してきた秋田県鹿角市十和田の「黒又山」（通称クロマンタ）では、後に「何かパワーを……」と訪れた方が何人もおります。しかし、そのかなりの数の方が「何も感じなかった……」「もう、パワーは無いんじゃないの?」といささかがっかりするような感想を持ってきます。

しかし、田沢湖の聖域にはそれは通用しません。田沢湖は今でも生きています。蠢うごめいています。そして、それらの超古代遺跡も起動しています。行けば呼応しますし、触れれば反応します。

クロマンタが静かになった……といのは実は私も感じています。

クロマンタの沈静には、かなり劇的な反応の後起きた後の現象です。その激しい現象は、おそらくは一九九九年で終息に向かったにちがいありません。

今、書いている、奥歯にものが挟まったような回りくどい言い回しですが、これらは、私の口、また、このような、不特定多数の方を対象には、よもや話すことはできません。もしかしたら、クロマンタの最後の咆哮ほろけうは闇から闇に葬られるかもしれません。

この古代遺跡の咆哮は……もう話すことはできません。その答えは田沢湖にあるのかもしれませんが。

古代日本の超文明……

神と人間の接触……

遺跡の咆哮……

それら、今の私達の潜在記憶にも残っていない「何か」が田沢湖にあります。

それは、ぜひあなたの肌で確認してみてください。  
私も可能な範囲でご案内申し上げたいと思います。

これらの事に関して、私もできうるかぎり「説明を付け加えていきたいと思えます。どうぞ、お気軽に電子メールでお問い合わせください。お待ち申し上げます。

吉祥姫ホームページ

<http://www.w02.so-net.ne.jp/~masakats/>

電子メール VZT00151@nifty.ne.jp

最後に、本書製作にあたりまして、「電子出版アズウェイ」をはじめ、田沢湖に関する情報を頂いた中仙町観光協会の高橋様、田沢湖の佐藤様、草剪様、など取材にご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。

ありがとうございました。

平成一二年三月

スタジオ吉祥姫 田中正勝

AsWe

デジタル新書

—— 探<sup>たん</sup>索<sup>さく</sup> 沈<sup>ちん</sup> 黙<sup>もく</sup> の 丘<sup>おか</sup> ——  
—— 神秘の湖 田沢湖畔に眠る超古代遺跡群 ——

平成十二年四月十五日発行

著 者 田<sup>た</sup> 中<sup>なか</sup> 正<sup>まひら</sup> 勝<sup>かつ</sup>

(スタジオ吉祥姫)

発 行 者 横 坂 明 比 古  
発 行 所 有限会社ラフ・アンド・タフ

〒一六〇—〇〇二二

東京都新宿区新宿一—二六—二

四谷御苑マンション七〇五

電話〇二—三三三五—三三七八

E-mail [info@aswe.gr.jp](mailto:info@aswe.gr.jp)

URL <http://www.aswe.gr.jp>

無断複製・二次配布を禁ずる

©2000 Studio Kisyouhi. Masakatn Tanaka

Made by ROUGH and TOUGH Co.,Ltd. in JAPAN.

All rights reserved.